

# 世界の教育どころどころ



村山伊之助

戦後の日本で根本的に改革されたものの一つは教育であった。六年の義務教育が九年に延長され、いわゆる六・三制が実施された。教育の制度だけでなくその内容においても、教育基本法に端的に示されているように、日本の特殊性はあまりなく、万国共通の紳士を目的とするような大変革がなされた。時の勢と言うか、占領下の姿と言ふか、時の教育界は少しの疑問を投げる者もなく、もっぱら授業

教育であるかぎり、日本の気候、風土、人情風俗、国民性や地理的位置を考えても日本特有の教育目標が必要であろうし、日本の産業経済の変化向上からも、学校制度の改善も考えられてよいはずである。中学卒業生の七割が上級学校に進学する現況で、今の高校の姿のまま、能力別、職業別の教育を考えなければ、青少年不良化に拍車をかける結果となるにちがいない。

日本人の模倣性とか外国崇拜の思想についても考えなければならない。教育の方法にしてもいすれの国でも最初は個人指導の形をとっている。歐米では数百年の間に個人指導を中心とした指導法が発達して、今日の形をしているので、一学級の児童は最高四十人位である。日本も寺小屋時代の読み書きソロハンの時代には、個人指導を中心として始まったが、明治五年小学校令がしかれた当時の日本は、封建時代のそれも鎖国の時代が明けたばかりであり、歐米の科

学中心の文化との差があまりに甚だしかった。先ずこれに追いつくための教育として、記憶中心の注入教授が考えられ、學習形態も少數の教師による大量生産方式である。學級指導の形が考へられたのもまた自然である。このような教育によつて僅か九十年の間に、教育一等国として米、英、独、仏、ソなどに伍するにいたつたので、その功績は認めるが、今日に至つては模倣の教育から創造の教育へと進むべきである。

日本の子どもたちが遊ぶ遊園地を見ると、商業主義ばかりが目立つものが多い。特にデイズニーランドそのままの遊園地があると聞いてはどうかと思う次第で、日本人の模倣性が悲しいほどである。本物のデイズニーランドは親子ともどもに楽しい施設ではあるが一つの教育目標を持つてゐるのである。その乗物にしてもモノレールあり、潜水艦あり、ケーブルとそのまま実用にもなるような近代設備である。資料館にはロケットその他近代アメリカ文明の最高を知らせるようになつてゐる。しかしこのようないい文明も、安易にできたものではなく、アメリカの先人たちがいろいろの苦労を重ねて開拓し、発展させた事を次々と体験させるのである。小舟で川を上つて行くと野象や鰐におそれれる。この危険をすぎて上陸すると人骨を山と積んだ背景から土人の襲撃が起つて、車に乗れば軽便鉄道で、途中では洪水や山崩れの天災地変にあつ。こうして遊びの中に子どもたちは先人の労苦を知り、新聞拓精神を身につけるのである。テ

インスニーラントそのままを日本に作るのは愚かなことである。

アメリカの教育制度は州によつて多少は違うが大体日本に似ている。小学校は大都市の学校はあまり参考にならないが、郊外や農村の芝生に覆われた運動場などは渋やましい限りである。しかし教材教具の研究や整備の状況は日本の方がはるかに上である。中・高・大学と上級学校ほど整備されている。歐米いずれの学校も入学難はないようである。日本の学校は入学試験が最大の閑門であつて、入学してしまつと大体卒業させるが、外国では入学は榮であるが卒業は相当に困難である。したがつて初めから楽しむために入学した学生は、生活を楽しんでいるが、ある資格を取ろうとする者や、卒業をしようとする者はよく勉強するようである。この階級制度についても日本でも考える必要があるのである。アメリカは人口の二割一千八百万人の黒人を持っており、首都ワシントンの人口の六割は黒人である。すべてに完全に平等なワシントンは将来、役人以外はすべて黒人となるのではと言われる程で、黒人問題はアメリカ最大の悩みである。多民族の集合国家であるアメリカの教育はすべて米国旗を中心に行なわれてゐる。すべての教室に国旗を掲げており、街を見ても国旗が多いこと、世界第一である、遵法精神と合理主義が強調されているが、單に法を守ればよいのではなく、また正しいことをすることをすればよいのではなく、それらの行動がすべてフェアでなければならぬとしている。スポーツだけがフェアープレイを

要求するのでなく生活そのもののフェアーを求めているのである。

しかしアメリカの学校教育にも色々のなやみもある。ニューヨークのある高校を突然參觀したところ、玄関前に黑白の学生二、三十人がたむろしていた。……の女子学生も煙草をすつていていたので、さつくハミリを向けると、煙草をかくすので禁止されていることがわかつた。校長に尋ねたところ、学校では禁止している。したがつて教室や運動場ではのまない。校外のプライベートの問題については学校は関知しないとのことであった。この点教育委員会で更に尋ねたところ、校外の責任は家庭だが、玄関と門の間は学校の責任である。アメリカには新聞さえ読まない家庭も多いので、僕の問題で困っているとの回答であった。

アメリカのように、個人的な僕の責任はすべて家庭にあるとの考え方もどうかと思うが、日本のように、道徳的にも家庭の弱体の故か、すべての責任を学校教育に負わせる風潮も改めなければならぬ。

南米のアルゼンチン、ラシルは植民から独立はしたが、文化度はおくれており、農業を主とした国であるので、国としては貧しい国である。貧富の差のはげしい国では本移民は中產階級として重要な位置を占めている。国民は個人の幸福追求にいそがしく、國家観などはどうよいのである。ハイノスアイレスの公立小学校でも、朝、昼、夜の三部制で校舎は、つだが、先生も子どもも交替制で

ある。したがつて先生の給与も悪く小学校教育は大の男のする仕事でなく、誰もがアルハイイトを持っているようである。しかし未開発の国であり、資源は豊富で気候は温暖の地が多いので、第三次大戦でも起これば世界の中心となる國かと考えられる。

スペイン、イタリー、キリシャは歐州文化のふる里ではあるが、禿山の多い豊かでない國々である。次、三男の生活に困る國であつたが、幸にして地中海の交通により海外發展をなした國々である。いずれも歴史的記念物や像、または博物館や美術館に、古い時代の物がよく保存されている。ローマ終着駅の近代的建物の隣りでも古城の石垣をよく残してある。すべてキリスト教中心の文化であり、寺院の力は今日もなお強大である。この点トイツなども同様であつて、税金にも宗教税を一割加算する程である。寺院は壮大であり、戦災の復興もさすがである。市民の日常の生活もキリスト教に規定されており、日曜日に働くことは安息日を乱すとして教会から先発され、罰金を課される程である。税金のがれに無宗教として登録すれば一切の行事からしめ出され村八分の状態となる。この状態が更にはけしなつた時には宗教改革も考えられるのである。

観光の國スイスには日本の参考となることが多い。山嶽によつた小さな國であるが、その農村など世界・富める國である。中立を守る爲には國民皆兵であり、予備役後には各自宅に武器を持ってい、道路はよく舗装されているが、ハイウェイは一本もない。スイ

スは観光の国であるので、あまりに道が良いと旅行者が通過してしまって作らないとのことで、日本のように商業道路は未完成であるのに、遊覽地に有料道路の発達しているのと対照である。

流行の国フランス ハリ市民はすべて黒を基調にした服装をしており、特殊な婦人以外は口紅もマニキュアもしていない。フランス人は流行はないようである。フランス人の自尊心と遠大な計画には改めて教えられるところが多い。今日のハリ市街の計画は百年以前のもので、下水も道路も見事である。建物も六階建てに統一され、その上に百階から半屋まであり雄大ではあるが當然としている。这样的な姿はない。

ロンドンは道も狭く、自動車もステーテン、日本と共に左側通行の國である。紳士の國として知られているが、戦後は段々と変りつつある。学校教育においてもいわゆる有名校はイートン、ハーロー、ケンブリッジ、オックスフォードであり、紳士の教育をもつて知られている。かつて英國は世界に君臨し、多くの植民地を持つていたので、紳士でさえあれば父親の業が継がれたのであるが、このような月謝の多く要する、貴族や財閥中心の教育は批判されつつある。アメリカの大學生産方式や、トイツの技術者大量養成方式である。アメリカの大學生産方式や、トイツの技術者大量養成方式によつて、実力主義の教育、科学技術振興の教育へと進みつつある。小学六年で国家試験によつて普通コースと職業コース

スへの進路を決定することも論議はあるが実施されている。ドイツでは四年生の時試験をして五年生から、将来の進路がわけられる。フランスでは六、七年を觀察期間とする新学制が進行中である。子どもに発達の迅速があるので、あまり早期に決定することは、適正を欠く恐れもあるが、日本のように普通教養コースの長すぎるのは、国全体の能率上からも再考を必要とする。教育の機会均等とは能力に応じた教育をすることであるので、子どもの適性を早く知って早期専門化の方向に進むべきである。

世界の国々を歩いてどこでもやっているのに、日本でなぜできないのかと思うことがある。寺院や文化施設で入場料を取るのは、ハチカンと日本だけのようである。文化国家と呼称するのはお恥かしい次第である。自分にさえ好都合なら他人の迷惑など意に介さない風も日本独特のもので、歐米人は個人主義の発達からか、自分に干渉されることもきらうが、他人に迷惑になる行為は絶対しない。これが徹底していることは見事である。ジュネーブのレマン湖畔を三才位の子どもを連れた若夫婦が散歩していたが、子どもが芝生に入つてなかなか出でこない。日本人であると立入禁止の札があつても、親は見ているか、親が芝生に入つて行き子どもを連れ出すところである。スイスの父親は自身芝生に入らず、わざわざ向う側に廻つて子どもを呼び、その場で尻を五つ六つと打つて芝生に入らない癖をしていた。(全国連合小学校長会長・千代田区立富士見小学校・幼稚園長)